

縄紋中期勝坂式土器に おける文様割付の研究

小林 謙 一

1 はじめに

縄紋土器をつくる際の割付は、文様構造を理解する上で重要であることが、鈴木公雄によって指摘された（鈴木 1968）。近年では桜井準也により、土器製作者の認知構造についての検討材料として注目されてきた（桜井 1998）。

筆者は、これまである程度大量に土器が出土した縄紋遺跡の検討の中で、個別に土器の文様割付を検討してきた。東京都真光寺三矢田遺跡の縄紋中期加曾利 E1 式（小林 1991）、神奈川県湘南藤沢キャンパス内遺跡群の勝坂式土器（小林 1993）、東京都大橋遺跡の加曾利 E3 式の土器群（小林 1999）、山梨県宮ノ前遺跡縄紋中期前葉五領ヶ台 2 式～勝坂 1 式土器を中心とした土器（小林 2002b）の文様割付の検討を重ねてきた。

その成果として、関東地方の縄紋中期における文様割付の変化をまとめ、時期・型式ごとに、文様区画パターンおよび文様割付方法に規格性があり、時期別の変遷が認められることを確認した（小林 2000ab・2002a ほか）。さらに、文様割付方法にみられる、土器製作者の認知構造についても言及した（小林 2000b）。

『縄文時代』13号において、関東地方縄紋中期の加曾利 E 式・曾利式土器を特に取り上げ（小林 2002a）、勝坂式的な正面性や左右非均等などの

特性を持つ割付方法や、3・5区画などの均等割付（縄などを用いる割付具の可能性）は、加曽利E1式において、4・6・8区画の均等割付（定規状の割付具の可能性）に変化することや、曽利系土器においても、胴部2単位から加曽利E式と同様な4・6・8区画へと規格化され、その後、曽利系と加曽利E系の同質化が進み、割付の上からは同一のあり方となっていく様相を整理した。

また、三内丸山遺跡の北東北地方円筒下層・上層式土器についても割付を検討し、口縁上の把手の配置などに、独特の特徴があることを指摘した。すなわち、大型円筒土器では、土器を定置したまま目印の粘土塊を口縁上に配置するなどして割付をおこなっていると考えられ、4単位の把手の内、3つはほぼ4分割の線上に配置されるが、残る一つ（おそらくは製作者から奥側の部分）の把手は、5度から10度ほどの偏りを持っていることが多いことが判明した（小林2014）。将来的には事例検討を重ねた上で、割付タイプa3などとして特徴づける必要があると考えている。

以上のように、土器文様割付は、縄紋文化における土器製作工程の復元、また土器製作者の認知構造の復元に重要な視点をもたらすと考えている。本稿では、その一端として、関東地方中期前半勝坂式土器群の文様割付を明らかにするべく、神奈川県内出土資料の検討をおこなった。

2 文様割付の分類

時期設定については、縄紋中期集落研究の新地平において設定した新地平編年13期31細別を用いる（黒尾・小林・中山1995）。なお、中期中葉の時期設定は、中山真治による。

割付とした、区画の角度の測定の方法は旧稿（小林1999, 2000a）に準拠するが、繰り返し文様のポイントとなる区画点を決めて、その位置を円周上に配し、任意の点（割付の最初のスタート点がわかる場合はそこから。

また胴部は口縁部の最初とした区画点）からの角度を計測した。よって、最初の点は0度、そこから359度までの角度で表現される。

以前の筆者の検討（小林 2000ab）に従い、区画配分の方法を「割付タイプ」として区分する。基本的に、旧稿（小林 2000b）での割付のタイプの分類を用いる。上部文様（または口縁部文様）と下部文様（または胴部文様）がある場合は、a1-fのように組み合わせて割付タイプを表記する。片方だけの場合は、「a」と単独で表記するが、欠損などにより上部文様が認定できない場合は「-a」とハイフンを付した（下部文様が不明な場合は「a-」とすべきだが、今回の資料には含まれない）。

a 角度割付型 4～8単位または12単位など、角度に応じて正確に割り付けられる。鈴木公雄のいう分割型割付法にあたる（鈴木1968）。4単位・8単位という4の倍数を基本とするが、時期により6単位、さらに特殊な例ながら5単位、7単位も認められる。器具を用いているであろう比較的正確な割付のa1と、目分量の可能性もあるやや誤差を持つa2とに分ける。a1は、各割付けが等角度の場合の±5度以内、a2は同じく±10度以内に納まるケースとする。

b 変則区画型 意識的に等間隔ではない変則的な区画割付をおこなうもの。縦区画土器、正面のある土器、非対称の文様構成の土器など。基本的に、各区画の間隔がすべて等角度でない場合である。特に一定の区画数は認めがたいが、文様帯の構成上、縦位区画では2単位・3単位・4単位、勝坂式などの正面性を重視した土器では4単位・5単位が多い。

c 単位数優先型 2・4・6・8単位と、定型的な横帯区画でありながら、正確な割り付けをおこなわず、間隔が極端に詰まったり、空いたりするもの。2・5・4・6・8単位の場合において、±10度を越えるズレが認められる場合にcと捉えることとした。7単位や9単位以上など、倍数でない区画数は、本来の区画数と認められない場合が多く、割付cには

比定されない。

d 成り行き型 単位数が決まっておらず、成り行きで施文していく。そのため、奇数区画数になったり、最後の単位が完全でないモチーフとなったりする。鈴木公雄の「集積型割付法（追い回し施文）」にあたろう。区画数に特に定めてはないが、5単位未満の場合は、実際に成り行きであったとしてもa2またはcに分類されてしまうと思われ、5単位以上しか結果的に認められない。最大で18単位が認められたが、土器器面が許す限り、何単位でも区画される可能性がある。基本的に最後の区画以外は、ほぼ等間隔である。

e 規格混乱型 施文モチーフが本来あるべき形から崩れてしまい、定型でなく、適宜変形するもの。1変形・くずれ、2一部略、3一部余計に割付に区分しておく。基本となる区画が本来存在する、その基本形を類推させることが前提となっており、結果的にはe1は4・6・8単位といった定型的な区画数、e2はそれから1引いた数、e3は同じく1足した数の区画数となる。基本的には、区画の間隔の過半数がほぼ等間隔でありながら、一部に間隔が大きく異なる区画が含まれる場合をeとした。

f 従属型 口縁部を割り付けた後、それにあわせて胴部・頸部の文様を割り付けるもの。

用いた土器資料一覧を表1に示すが、口縁区画は口縁部（Ⅰ文様帯）の文様区画単位数、胴部区画は同じく胴部（Ⅱ文様帯）の文様区画単位数である。タイプとした欄は上記の割付タイプである。表2に測定した各区画結節点の角度を示す。

縄紋中期勝坂式土器における文様割付の研究（小林）

表 1 割付測定土器一覧

図	遺跡	報告No.	型式	新地平 時期	口縁 区画	胴部 区画	タイプ	備考
図 1-1	原口	6号埋設 1	五領ケ台 1	1	8	6	a2-c	
図 1-2	原口	J17 住 1	五領ケ台 2	2b	2	4	a2	
図 1-3	原口	J12 住 9	東海系	2	4	4	a1-b	
図 1-4	当麻	3 住 24 図 7	勝坂 2a	7b	4	5	a2-b	
図 1-5	川尻中村	53 住 350	勝坂 2a	7b	6	7	b-d	
図 1-6	南原	SI01P212-16 図 2	勝坂 2a	7b	4	3	a2-b	
図 2-7	川尻中村	55 住 241	勝坂 2b	8a	1	4	b	口縁は突起
図 2-8	当麻	355 図 40	勝坂 2b	8a	0	6	b	
図 2-9	川尻中村	30 住 198	勝坂 2b	8a	1	3	b	口縁は突起
図 2-10	南原	SI01P140-16 図 4	勝坂 2b	8a	4	4	a1-a2	
図 2-11	南原	SI12P103-93 図 2	勝坂 2b	8a	0	6	a2	
図 2-12	川尻中村	53 住 323	勝坂 2b	8a	4	2	a1-f	
図 2-13	原東	J1 住 炉 153P1	勝坂 2b	8a	4	9	d	
図 3-14	川尻中村	82 住 191	勝坂 2b	8b	0	4	b	マーク？
図 3-15	南原	SI04P200-42 図 1	勝坂 2b	8b	?	4	-c	
図 3-16	南原	SI04 炉体 250-42 図 4	勝坂 2b	8b	1	7	-d	スタート
図 3-17	川尻中村	29 住 70	勝坂 2b	8b	?	8	-d	スタート
図 3-18	南原	SI07P066-56 図 1	勝坂 2b	8b	1	5	b	口縁は突起
図 3-19	南原	SI04P235-43 図 10	勝坂 2	8	7	-	d	浅鉢
図 3-20	当麻	3 住 24 図 6	勝坂 3a	9a	0	4	b	
図 3-21	当麻	7 住 48 図 21	勝坂 3a	9a	0	4	b	
図 3-22	川尻中村	遺構外 361	勝坂 3a	9a	0	6	b	
図 3-23	南原	SI12 炉体-92 図 1	勝坂 3a	9a	4	4	a1-f	
図 4-24	南原	SI04P185-42 図 2	勝坂 3a	9a	4	5	-b	
図 4-25	南原	SI15 炉体(1)-117 図 1	勝坂 3a	9a	0	5	b	
図 4-26	原東	J1 住 炉 154P2	勝坂 3a	9a	1	5	-d	口縁は突起
図 4-27	原東	J1 住 炉 155P3	勝坂 3a	9a	1	2	b	口縁は突起
図 4-28	当麻	B10 区 355 図 43	勝坂 3a	9a	?	3	b	
図 4-29	南原	SI14P423-104 図 9	勝坂 3a	9a	?	4	b	
図 4-30	南原	SI14 炉 3 炉体(2)-103 図 3	勝坂 3a	9a	?	2	b	
図 4-31	当麻	62 住 237 図 1	勝坂 3b	9b	0	4	b	
図 4-32	当麻	73 住 273 図 1	勝坂 3b	9b	3	3	a2	ミニチュア
図 5-33	当麻	D8 区 351 図 6	勝坂 3b	9b	1	4	b	
図 5-34	川尻中村	85 住 286	勝坂 3b	9b	1	2	b	口縁は突起
図 5-35	当麻	5 住 37 図 7	勝坂 3b	9b	4	4	a2-f	
図 5-36	川尻中村	遺構外 242	勝坂 3b	9b	?	4	b	ミニチュア
図 5-37	南原	SI14 炉体(1)-103 図 1	勝坂 3b	9b	?	4	a2	
図 5-38	原口	J7 住 6	勝坂 3b	9b	?	2	b	
図 5-39	当麻	74 住 278 図 1	勝坂 3b	9c	13	0	d	
図 6-40	当麻	74 住 278 図 1	勝坂 3b	9c	0	4	-a2	
図 6-41	川尻中村	83 住 237	勝坂 3b	9c	2	4	b	口縁は突起
図 6-42	南原	SI08b 炉体(1)-67 図 1	勝坂 3b	9b-9c	4	4	a2-b	

表2 口縁部・胴部文様区画角度一覧

図番号	文様帯	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
図 1-1	口縁	0	40	85	132	181	222	272	318					
	胴部	48	85	129	182	257	320							
図 1-2	胴部	0	82	168	260									
図 1-3	口縁	0	90	171	278									
	胴部	0	120	190	278									
図 1-4	口縁	0	100	175	270									
	胴部	0	88	165	232	303								
図 1-5	口縁	0	68	107	182	257	310							
	胴部	40	106	152	190	238	278	330						
図 1-6	口縁	0	95	196	295									
	胴部	56	180	282										
図 2-7	口縁	0												
	胴部	60	141	225	296									
図 2-8	口縁	0	45	105	166	229	286							
図 2-9	口縁	0												
	胴部	77	172	313										
図 2-10	口縁	0	89	181	270									
	胴部	57	146	230	314									
図 2-11	胴部	0	65	133	195	241	300							
図 2-12	口縁	0	91	181	269									
	胴部	90	270											
図 2-13	胴部	0	45	80	120	167	209	246	282	320				
図 3-14	胴部	0	89	170	256									
図 3-15	胴部	0	80	186	280									
図 3-16	口縁	65												
	胴部	0	57	112	170	223	279	327						
図 3-17	胴部	10	64	109	163	212	259	300	330					
図 3-18	口縁	0												
	胴部	5	53	178	229	290								
図 3-19	胴部	0	26	121	166	218	263	312						
図 3-20	胴部	0	102	173	274									
図 3-21	胴部	0	84	180	267									
図 3-22	胴部	0	56	132	190	264	297							
図 3-23	胴部	0	91	177	275									
図 4-24	胴部	0	82	141	210	287								
図 4-25	胴部	0	44	134	212	295								
図 4-26	口縁	0												
	胴部	4	50	129	220	294								
図 4-27	口縁	0												
	胴部	5	181											
図 4-28	胴部	0	89	210										
図 4-29	胴部	0	112	183	263									
図 4-30	胴部	0	171											

縄紋中期勝坂式土器における文様割付の研究（小林）

図 4-31	胴部	0	39	169	234													
図 4-32	口縁	0	107	244														
	胴部	52	180	281														
図 5-33	口縁	0																
	胴部	0	90	193	255													
図 5-34	口縁	0																
	胴部	39	215															
図 5-35	口縁	0	99	194	275													
	胴部	57	157	234	320													
図 5-36	胴部	0	114	190	310													
図 5-37	胴部	0	89	175	268													
図 5-38	胴部	0	184															
図 6-39	口縁	0	22	42	68	99	130	154	181	208	236	263	293	321				
図 6-40	胴部	0	81	175	282													
図 6-41	胴部	0	100	181	281													
図 6-42	口縁	0	89	184	269													
	胴部	301	60	148	236													

3 資料と結果

分析に用いた資料は、神奈川県内の縄紋時代中期の土器である。出土遺跡は以下の遺跡である。

神奈川県横浜市保土ヶ谷区南原遺跡（小川他 2002）

神奈川県相模原市当麻遺跡（白石他 1977）

神奈川県相模原市（旧城山町）川尻中村遺跡（天野 2002）

神奈川県相模原市（旧城山町）原東遺跡（天野 2000）

神奈川県平塚市原口遺跡（長岡 2002）

これらの遺跡で発掘調査され報告されている縄紋時代中期土器 42 資料を扱う。これらの資料は、2000 年から 2002 年にかけて、かながわ考古学財団において割付を計測させていただいたものである。土器の実測図は各報告書による。表 1 の時期に記した新地平編年は、黒尾・小林・中山（1995）による時期比定である。口縁部・胴部区画数、割付タイプ（2 節参照）を

記す。以下に概略する。

1 から 3 は平塚市原口遺跡の中期初頭土器の例である。中期初頭については、旧稿（2000a）に三矢田遺跡やあきる野市前田耕地遺跡の事例を示しているが、まだ数が少ないので、今後のために掲載しておくものである。

1 は、胴部に間隔の開く結節縄紋を縦位に施す五領ヶ台 1 式土器である。口縁は 4 単位の波状口縁基本で、頸部に 5 単位の文様を配する。2 は縦区画系の土器で、胴部を柱状に 4 区画する。3 は東海系の土器と考えられるが、口縁には J 字・U 字状の垂下部分を区画の結節点として計測した。胴部は波状の隆線がめぐり、各波状の隆線のトップを区画の点として計測した。

4 から 6 は、勝坂式 2a 式、藤内 I 式後葉に相当すると考えられる土器である。口縁部文様などは比較的等間隔に区分するものが見られ、胴部についても重帯区画のものは等間隔を意識しているかの節があるが、4 など抽象的な隆線を配するものは、割付タイプ b と捉えられる。

4 は当麻遺跡の多段に重帯する深鉢の系譜である。口縁は口唇上に突出した突起部分から口縁部の半弧状隆線による区画の始まる部分を区画点とした。胴部は頸部の横走隆線から下部に垂下する曲隆線の結節点を計測した。口縁部区画はやや不均等に割り付けられた割付タイプ a2、胴部は抽象文を均一性にとらわれず配置した割付タイプ b とした。

5 は川尻中村遺跡の文様帯重帯の深鉢である。口縁部文様帯として口縁部の突起及びサクランボ状のモチーフを持つ隆線の結節部を区画点として計測した。胴部は最下段の楕円区画の右端を区画点として計測した。楕円区画は不均一に配され成り行きで施文された割付タイプ d と考えられる。

6 は南原遺跡出土の、やや異質な感じのある深鉢で、東海地方の土器の影響も考えられるが、口縁部区画が半弧状区画をなし、区画内の充填文様から当該時期に比定した。口縁部区画はやや不均等に割り付けられた割付タイプ a2、胴部は曲隆線を適宜に横走させた割付タイプ b とした。

7 から 19 ままでが勝坂 2b 式、藤内 II 式並行の土器で、7～13 がやや古

縄紋中期勝坂式土器における文様割付の研究（小林）

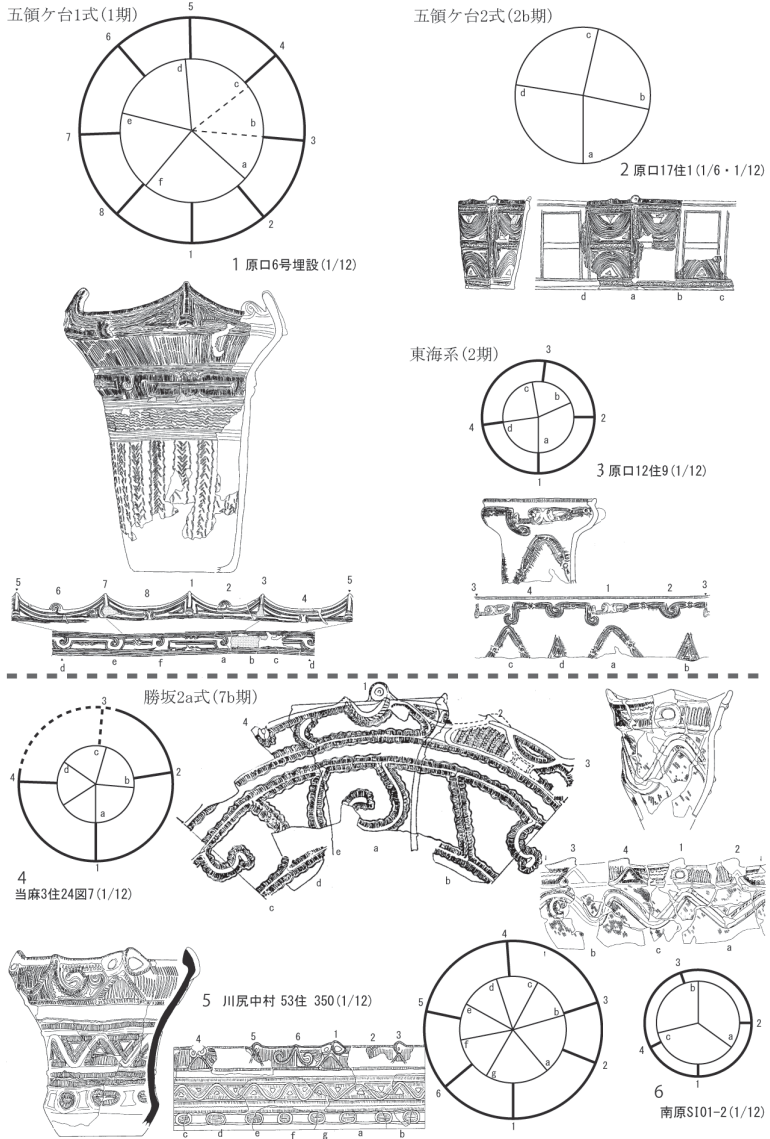


図1 勝坂式期土器割付(1)

い新地平編年 8a 期相当, 14 ~ 18 が勝坂 2 式後半の新地平編年 8b 期に比定される。

7 および 9 は川尻中村遺跡出土の胴部に抽象文を配する深鉢である。口縁部に把手を 1 単位配し, 胴部は抽象文に比される曲隆線を含む隆線を垂下させる。隆線が垂下する部分を胴部区画の区画点とした。9 の胴部は Y 字状隆線が 3 単位配される。ともに割付タイプ b とした。

8 は当麻遺跡出土のパネル状嵌め込み文を持つ縦区画系の円筒形深鉢である。口縁部は無文で区画がない。胴部は縦区画する垂下沈線の上端を区画点として測定した。一部に三角形の大柄のモチーフを嵌め込むなど, 区画を意識しない部分があり, 割付タイプ b とした。

10 は南原遺跡出土のやや小型の深鉢である。口縁は波状口縁 4 単位, 胴部は半弧状隆線 4 単位が, ほぼ正確に割り付けられ, 割付タイプ a とした。

11 は南原遺跡出土の縦区画系の円筒深鉢で縦区画の文様が 6 単位にほぼ正確に分割され, 割付タイプ a2 とした。

12 は川尻中村遺跡出土の胴部に抽象文を配する深鉢である。口縁部は欠損するが, 円形の凹文が 4 単位配される口縁部区画として計測した。なお, 胴部にはサンショウウオなどとされる抽象文が 2 単位配される。口縁部円形凹文について正確に割り付けた後, 胴部の 2 単位は口縁部凹文 2 箇所に従って配していると見えるので, 割付タイプ a1-f とした。

13 は原東遺跡出土の, 12 と類似した抽象文系の深鉢である。16 は頸部の楕円区画 9 単位を計測したが, この文様についてはほぼ等間隔であるものの 9 単位の単位数から集積型の割付と考え割付タイプ d とした。

14 は川尻中村遺跡出土の胴部に抽象文を配する深鉢である。口縁部は無文で, 胴部に 4 単位の抽象文を配し, 一部に割付時の目印と考えられる刻みが見られ, マークとも考えられるが, 割付の角度は正確ではなく, 等分のためのマークではなく文様施文上の目印と考えられる。割付タイプ b